

平成25年度研究開発実施報告書（要約）

1 研究開発課題

豊かな人間性と創造性を育むために、道徳・特別活動・総合的な学習の時間を統合した新領域「創造活動」を創設し、多様な集団や価値観の中で、「分かち合い、共に未来を創造する子どもの育成」に向けた教育課程に関する研究開発

2 研究の概要

全学年に新領域「創造活動」を新設する。この「創造活動」では、多様な集団や価値観を介して自らの生き方・在り方を生み出す自分づくりの学習を目指す。また、自らの見方・考え方を求め続ける「教科学習」は、外国語科も含めた10教科とする。この2領域が往還的に働くカリキュラムを構想し、豊かな人間性や創造性を育むことを目指す。

具体的には、① 2領域で育む分かち合う子どもの姿の明確化

② 新領域「創造活動」における指導と評価の在り方

について本校としての提言を行う。

3 研究の目的と仮説等

(1) 研究目的

これからの社会は急激に変化していくといわれており、その中で予測しづらい課題にどう立ち向かい解決していくことができるのかが重要である。つまり、「実社会・実生活の中で起こる様々な課題に向かって、多様な価値観や背景をもつ人々と共に、互いの意見や考えを伝え合い、認め合いながら自己の生き方・在り方を生み出し、未来を創造していくことができる」ということが大切であると考えた。

また、これまで本校では、学習の自立を図る「教科学習」と生活の自立を図る「ふれあい学習（道徳と特別活動の統合）」、自己の確立を図る「楷の木活動（総合的な学習の時間）」の1活動2学習で教育課程を構成してきた。1活動2学習での実践を通して、「認識と行動の統一に関する課題」「学ぶ価値の実感」「多様な人との関わりから自らの見方・考え方を広げ深めていく人間性」「未来に対する夢をもち、自らの生活や社会をよりよくしようと働きかける態度や資質」における課題が明らかになってきた。このような課題は、平成25年6月に閣議決定された「第2期教育振興基本計画」における我が国を取り巻く危機的状況の中で同様に述べられており、学習意欲や規範意識に対する課題があることや若者の内向き志向等について指摘されている。これは、日本の若者・子どもたちが諸外国に比べ自己肯定感が低く、将来への夢が描けないという実態を示していることにもつながる。

したがって、これからの変化の激しい社会を生き抜いていくためには、一人一人が自律した人間として、個人や社会の多様性を尊重し、他者と協同しながら新たな価値を創造していく力が育まれるような教育が求められているといえる。そこで本校では、「分かち合い、共に未来を創造する子どもの育成」を目指し、教科学習と新領域「創造活動」の2領域による新カリキュラムを構想することにより、豊かな人間性と創造性をもった子どもを育むことを目的とする。

(2) 研究仮説

- ① 自分みがきの教科学習と自分づくりの創造活動の2領域からなるカリキュラムの構想により、豊かな人間性や創造性を育むことができる。
- ② 「教科学習」では、感覚・感性を働かせながら仲間と共に課題を解決し、学び合う必要感や学ぶ価値を実感する学習を構想することで、自分の「ひと・もの・こと」に対する見方・考え方を求めていく子どもを育むことができる。
- ③ 「創造活動」では、多様な関わりを通して学び合うことの意味を見出し、自ら学び進んで「ひと・もの・こと」へ働きかけ、自己の「生き方や在り方」を創造していこうとする意欲や態度を育てることが重要である。

上記の仮説における「教科学習」と「創造活動」は、現在の学習指導要領で考えられている目標や内容を土台としながらも、これからの社会で求められる資質・能力を育むために、以下のように捉えなおした上で新しいカリキュラムを構想することを目的としている。

○ 教科学習

教科学習では、自らの資質・能力を高めていく過程に着目し、「分かち合い、共に未来を創造する」ために必要な見方・考え方をつかむ領域として位置付ける。

ここでの「見方・考え方」とは、自己を取り巻く「ひと・もの・こと」に対して、何をどのように見て、どのように考えていくのかという、見る方法や思考の筋道をも意味し、認識の仕方ともいえる。そして、この過程の中で、各教科における物事の本質を捉え、自分にとって意味のある「知」を創造していく。また「知」とは、「ひと・もの・こと」

と関わる中で見出された自分にとって意味のある物事の本質や理解である。問題解決の過程において、知識や技能が互いに関連付けられ自分なりに構造化され、子どもたち自身が納得し、多様な場面で生きて働くものとする。

そして、教科学習では、自分だけの見方・考え方が伸びていくものではなく、共に学ぶ仲間を理解し、互いの「ひと・もの・こと」に対する見方・考え方を吟味・整理しながら共によりよい学習をつくり上げていくことである。特に、認知的側面だけでなく、情動的側面も大切にすることで、主体的な学習を目指すこととした。

○ 創造活動

創造活動では、自分や社会・集団における課題に気づき、それらを解決するために多様な価値観をもつ仲間（他者）との関わりを通して、自らが求める姿を子ども自身が自覚し、自己の生き方・在り方をつくる領域として位置付ける。

「生き方・在り方」とは、自分を取り巻く「ひと・もの・こと」に対して個性的・創造的に感受・想像し、それらを受容（共感）したり、開放（表出、表現）したりする過程で、自己の価値の捉え直しをしたり新たな価値を見出したりした自分にとって意味のある態度や方法と定義づけている。また、ここでの「価値」とは、自己の社会生活の中で生きて働くものであり、自他をよりよく成長させていくものである。価値はいつの時代においても大事にされるべき本質的なものを含みつつ、状況や変化によって現在の必要に合うように修正・付加されていくものととらえることもできる。したがって、子どもたち自身が様々な価値観に触れながら、自ら価値判断していくような学びの場を大切にしなければならない。

そこで、創造活動では、同学年による学級集団と、異学年（1～6学年）による縦割り集団の2つの集団を組織する。同学年で学級創造活動は、毎日25分間の活動を全学年に位置づけ、個々の思いや願いに基づいた課題を設定し、個人(集団)追究を中心に行う時間とする。一方、縦割り集団による縦割り創造活動は、週4～5時間当たりの時間を位置づけ、その集団で目指す目標を共有しながら、プロジェクト的な活動を展開する。そして、この2つの集団での学びの関連によって、自己の生き方・在り方を深化させていく。

(3) 教育課程の特例

① 学校教育法施行規則50条【教育課程の編成】

- ・外国語活動の教科化を行い、全学年で外国語科を実施
- ・道徳、総合的な学習の時間、特別活動を統合するとともに、各教科の時数を削減し、新領域「創造活動」を全学年に設置

② 学校教育法施行規則51条【授業時数】

本校が取り組もうとする授業時数							現行の法規による授業時数						
年 領域	1	2	3	4	5	6	年 領域	1	2	3	4	5	6
教科	745	805	770	805	805	805	教科	782	840	805	840	805	805
							外国語活動	0	0	0	0	35	35
創造 活動	140	140	175	175	175	175	道徳	34	35	35	35	35	35
							特別活動	34	35	35	35	35	35
							総合的な学習の時間	0	0	70	70	70	70

※低学年については、本校の時数を標準時数増とする。(第1学年 総時間数 885, 第2学年 総時間数 945)

③ 学校教育法施行規則50条【教育課程の基準】

	本校が取り組もうとする各領域の目標及び内容	現行法規による各領域の目標及び内容
教科学習	小学校指導要領の学年の目標や内容の枠をはずして取り扱う場合もあり、問題解決に向かうための見方・考え方を求める学習の視点から、取り扱う。	小学校指導要領に示されている目標や内容によるものとする。
創造活動	小学校学習指導要領の目標や内容にとらわれず、多様な集団での関わりの中から学び合う価値を見出し、自己の生き方や在り方を生み出す視点から、取り扱う。	

○ 教科学習

- ・外国語活動の教科化を行う（外国語活動は全学年で実施する）。その際、教科化の方向性に基づいた学習内容を位置付け、指導や評価の在り方を構築する。
- ・各教科において、「見方・考え方」に着目した問題解決的な学習を促す単元を貫く課題づくりを工夫することで、各教科の時数減に対応する。

○ 創造活動

- ・道徳、特別活動、総合的な学習を統合し、多様な集団との関わりの中で自らの生き方や在り方を生み出す新領域「創

造活動」を創設する。

- ・ 学級集団による学級創造活動と、異学年による縦割り創造活動の2つの活動によってカリキュラムを構想する。全学年週4時間の縦割り創造活動、高学年は週1時間あたりの学級創造活動を位置付ける。また、毎日25分間の学級創造活動も位置づけ、2つの活動のよりよい関連も組織することとする。

4 研究内容

(1) 教育課程の内容

① 育みたい資質・能力の設定

これからの社会は急激な変化をしていくと言われている中、OECDで打ち出された「キーコンピテンシー」の概念が提唱される一方、ATC21S (The Assessment and Teaching of 21st-Century Skills) が中心になり、世界の教育科学者や政府、国際機関と連携して21世紀の人材が身に付けておくべきスキルが検討されており、「創造力とイノベーション」「情報リテラシー」「コミュニケーション」等の10のスキルが出されている。つまり、国立教育政策研究所の「教育課程の編成に関する基礎的研究」(2013)に示された世界の動向をみると、目指す資質・能力は各国のアプローチの仕方でもその名称が異なるが、社会の変化に対応できる汎用的な資質・能力の育成が求められている。多くの知識や技能の獲得だけを目的とするのではなく、多様な状況に対応できる力、自らの体験に基づき自ら学び続ける力、異なる文化背景や価値観をもつ他者とよりよく関わる力、自律的に行動していく力等、自ら課題や目的意識をもって共に学ぼうとする姿勢をもち、お互いの学びを分かち合ったり応援し合ったりしながら自己を確立していくことが求められているといえるだろう。そこで、本校では、これからの社会を生き抜く子どもたちに必要な資質・能力を以下のように考え、カリキュラムを構想することとした。

夢や憧れをもち、自律的に学び続ける力	現在の自己の姿と目指す自己の姿を明確にもち、目指す自分や解決したい課題に夢や憧れをもち、追究し続ける力
「ひと・もの・こと」へ共感的・協同的に関わる力	自分や多様な他者、状況等を肯定的に受け入れると共に、自他の課題を解決しようと自分の考えをきちんと表しながら他者と協同して問題を解決していく力
創造的に問題を解決し、価値を創造する力	自分にとっても他者(社会・集団)にとってもよりよい問題解決の見通しや方略を見出したり、そこでの価値や活動を創造したりする力

この3つの資質・能力は、3つが切り離されたものではなく、むしろ互恵的な関係性をもつものであり、目指す子どもにとって不可欠なものだと捉えている。そして、この資質・能力を発揮された姿として、「自他を肯定的に受け止め、自他の成長に向けて夢を描く姿」「多様な価値観をもつ他者の見方・考え方を認め、互いに生かし合ったり応援し合ったりする姿」「実社会・実生活に対して問いをもち、積極的に『ひと・もの・こと』に働きかけ、豊かに関わりながら解決し、そこでの価値のよさを自分の生き方・在り方へ生かしていく姿」等が挙げられ、その姿がまさに「分かち合い、共に未来を創造する子ども」として想定されると共に、どの姿も、本校がこれまで大切にしてきた「子ども主体の学びの姿」であると考えられる。

② 教育課程の概要

本教育課程を構想するにあたって、先述した育みたい資質・能力の育成という視点から検討する。そして、特に、子どもは本来、「なぜだろう、知りたい」「学びたい」「できるようにになりたい」と思い、自己を取り巻く「ひと・もの・こと」へ自ら働きかけようとする存在であるとの捉えから、子どもの思いや願いを重視し、「子ども主体の学び」を教育課程全体に位置付けることで、目指す子ども像に迫りたい。つまり、子どもは、自らの生活場面における様々な「ひと・もの・こと」との出会いの中で、素朴な思いや願い(問い)をもち、互いの問いを語り合うことによって、目的意識を共有し、問題を解決しようと試行錯誤し始める。そして、問題を解決した結果のみを大切にするのではなく、その過程に着目することで、仲間と学び合う必要感や価値を実感し、豊かな人間性や創造性が育まれるのである。だからこそ、教育課程全体で、「子ども主体の学び」に重点を置き、カリキュラムを構想していくこととする。

そこで、自己の生き方・在り方を生み出すことを目指す「創造活動」と、そのために必要な見方・考え方を追究する「教科学習」の2領域によるカリキュラムを構想することとした。



ア 教科学習

教科学習では、知識・技能等の結果に着目するのではなく、自らの資質・能力を高めていく過程に着目し、「分かち合い、共に未来を創造する」ために必要な見方・考え方をつかむ自分みがきの領域として位置付ける。そして、ここでいうみがきとは、自分だけの見方・考え方が伸びていくものではなく、共に学ぶ仲間を理解し、互いの「ひと・もの・こと」に対する見方・考え方を吟味・整理しながら共によりよい学習をつくり上げていくことである。特に、認知的側面だけでなく、情動的側面も大切にすることで、主体的な学習を目指すこととした。

【教科学習の目標】

感覚・感性を働かせながら、仲間とともに共感的・協同的に問題を解決し、学び合う必要感や価値を実感していく中で、自分の「ひと・もの・こと」に対する見方・考え方を求めていく態度を育てる。

また、各教科において、以下のような見方・考え方を養っていくことを目指す。

教科	育みたい見方・考え方
国語科	言語表現やそれにつながる事象を感じ取り、目的や意図に合った言語表現を選んだり、生かしたりしながら言葉の面白さやよさに気づき、自分の思いや考えを伝える言語表現に生かしていこうと考えること
外国語科	言語や文化の違いを感じたり想像したりしたことを生かして、外国語で伝え合うことの面白さやよさを見出していくこと
社会科	社会生活や地理的・歴史的・公民的な事象について自ら問題を見出し、諸資料に基づいて多面的・多角的に考察・判断し、意思決定することを通して、国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者としての在り方を求めていこうとすること
算数科	自分が解決すべき問題を見付け、友達と話し合う中で多様な方法を分類・整理し、問題解決の全貌が見えるようにしながら、簡潔・明瞭・的確な方法で解決していこうとすること
理科	自然に親しみ、見通しをもって観察・実験などを行い、自然界に存在するきまりを見出したり、自然の不思議さや面白さ、巧みさや美しさについて感じたりしながら、自然についての自分なりの捉えを豊かにしていくこと
生活科	見通しをもち、自分自身や自分を取り巻く環境に主体的に関わろうとしたり、体験から得た気づきをもとに、自分の生活の中に生かしていこうとしたりすること
音楽科	音楽を聴いて感じ取ったことをもとに音楽でイメージをもち、音楽の面白さを意味付けたり音楽による効果を見出したりすると共に、音楽の面白さからよさへと転移して考えること
図画工作科	形や色、構成などの視点から対象の面白さやよさ、美しさを感じ取り、イメージしたことを造形の面白さへと転移して考えること
家庭科	実践的・体験的活動で感じ取ったことをもとに、自分の課題を見出し、自分にとってのよりよい生活のイメージをもつと共に、衣食住などについての面白さを見出したり、そのよさや大切さを自分の生活とつないで考えたりすること
体育科	運動をしたりその動きを見たりしたことをもとに、運動の面白さを見出しそのよさを意味付けること 自分の生活の振り返りや体験的な活動をもとに、健康や安全の大切さに気づき、自分の生活につなげるよさを見出すこと

イ 新領域「創造活動」

創造活動では、自分や社会・集団における課題に気づき、それらを解決するために多様な価値観をもつ仲間（他者）との関わりを通して、自らが求める姿を子ども自身が自覚し、自己の生き方・在り方をつくることを目指す。現学習指導要領は、「道徳」「特別活動」「総合的な学習の時間」で編成されており、規範意識や道徳性、社会性、探究的に問題解決していく力等、個々の教育目標が設定されている。本校は、昨年度までふれあい学習（道徳と特別活動の統合）と楷の木活動（総合的な学習の時間の一環として取り扱った活動）を実施し、そこでの成果と課題を分析した。切実感のある課題設定の大切さや、子どもの思いや願いを重視した活動のよさを見出すことができた。その中で特に、子どもたちの実際の学びの文脈から見つめたとき、ある一定の枠の中で納まるものではなく、学びの中から生み出されてくる「価値」は、横断的・関連的なものであり、教師自身がそれらを敢えて一体的なものとして価値付けていくことで、より一層豊かな学びになることがうかがえた。つまり、価値を自覚していく過程と問題を解決し実践化していく過程が、一体となったときにより質の高い課題把握となり、単なる日常生活の上での問題を解決するのではなく、自らの生き方・在り方についての解決を意味することとなることが分かってきた。

そこで、ふれあい学習と楷の木活動を統合した新領域「創造活動」を創設し、自分づくりの領域として位置付けることとした。

【創造活動の目標】

多様な価値観や背景をもつ集団との望ましい人間関係を土台とした探究的な課題追究を通して、主体的に問題に取り組み、共感的、協同的に「ひと・もの・こと」と関わろうとする実践的な態度を養うと共に、教科で養った見方・考え方を生かして問題解決をしたり、自己や集団にとって必要な価値を生み出したりする資質・能力を養い、自己の生き方・在り方を深化できるようにする。

創造活動では、子どもたちの主体性により一層着目し、「ひと・もの・こと」への豊かな関わりを大切にする。そこで、同学年による学級集団と、異学年（1～6学年）による縦割り集団の2つの集団を組織する。同学年で学級集団では、日常的な課題を解決したり、個々の思いや願いに基づいた個人追究を行ったりする。一方、縦割り集団では、互いに目指す目標を共有しながら、主体的な活動を展開する。その様々な集団で生み出した価値は、自分にとって必要感のあるものとなり、自己の生き方・在り方を深化させていく礎になると考えた。

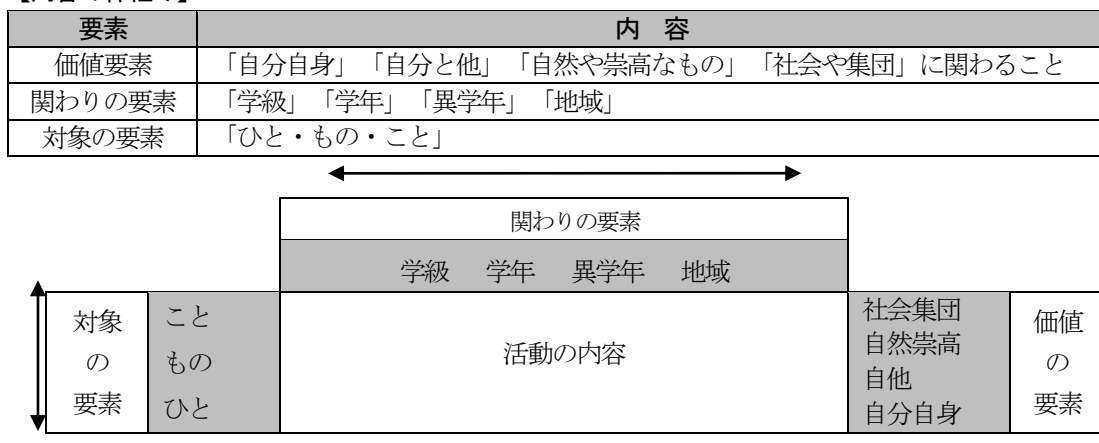
したがって、縦割り創造活動では、様々な価値観をもつ仲間と、一つの目的に向かって互いの考えに共感し合い、協同的に問題解決することをねらいとする。そして、その過程で必然的に生み出される価値を共有しながら、自らの生き方・在り方に生かしていくことで、自己の価値観をよりよいものへ変革していくことを目的としている。また、学級創造活動は、自分の思いや願いにこだわりをもち、そこでの問題を自分なりに解決していく自律的な取り組みをねらいの中心にとしたい。つまり、自分なりにどのように課題を設定し、解決していこうとするのが大切になり、その過程で切実感をもって「ひと・もの・こと」に豊かに関わろうとするのではないかと考える。

	特徴的な目的・内容	共通する目的・内容	活動方法	時間設定
縦割り創造活動 ※異学年（1～6学年）による縦割り集団	多様な価値観や背景をもつ仲間とよりよく関わりながら、みんなで解決したい（取り組みたい）問題を設定したり、様々な体験をしながら解決したりしていくこと	問題を解決していく中で、自分や集団にとって必要な価値を生み出し、自己の考えや行動を見つめ直したり、これからの自分の生き方・在り方を考えたりすること	プロジェクト活動	<ul style="list-style-type: none"> ・月から木曜日の4校時及び金曜日の6校時 ・月に一度、3時間連続 ・清掃 ・ランチルーム給食
学級創造活動 ※同学年による集団	自分の思いや願いにこだわりをもつことで問題を設定し、自分なりの解決方法でゴールに迫ろうとすること	問題を解決していく中で、自分や集団にとって必要な価値を生み出し、自己の考えや行動を見つめ直したり、これからの自分の生き方・在り方を考えたりすること	個人（集団）探究 ※学年の発達段階に応じてその探究が質的に高まる	・毎日25分

また、それぞれの活動を設定していく上で、子どもの思いや願いを重視する視点から、その内容が「何でもあり」では、育みたい資質・能力へ迫ることが難しい。反対に教師から与えるような「内容ありき」では子どもの思いや願いに基づいた主体的な学びを構想することは厳しい。そこで、子どもと共に課題設定をする際、教師は下記のような枠組みを想定しながら共に課題設定をしていく必要がある。ここでの枠組みは、現在のところ、子どもたち自身に生み出してほしい「価値」に関わることを核としながら、それらを創造していく過程で必要となる「関わり」とその対象を設定している。年間の始めに、子どもたちが設定しようとしている課題は、多様な「ひと・もの・こと」との出合いが担保されているか、学級や異学年さらには地域との関わりも見えるか、そして、活動を通して、気付いてほしい価値との関連があるか等、それらを配慮しながら、子どもと共に活動をつくるのである。

このように、内容の枠組みを意識して活動を設定することで、「3つの関連がどうであるか」「年間を通してどのように変容していくか」「発達段階に応じてどのような差異があるか」「どこをねらうか」を明らかにすることができる。

【内容の枠組み】



(2) 研究の経過

	実施内容等
第1年次	<p>本校で目指す子どもの姿を明確にするとともに、教科学習と創造活動からなる教育課程を編成し、それぞれの領域での研究内容や方法について検討する。研究仮説を設定し実践を進める。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究構想案を作成し、「分かち合い、共に未来を創造する子ども」の姿を明確にする。 ・各領域における理論構築を行うとともに、実践を通して研究内容や方法における課題を分析し、研究内容や方法を

	<p>検討することで、附属高松小プランの方向性を探る。</p> <ul style="list-style-type: none"> 外部評価として、運営指導委員会及び学校評議委員会での研究協議により、教育課程の課題を検討するとともに、研究内容や方法についての方向性を明らかにする。 本校の研究発信の場である初等研究発表会の開催において、本校の取り組みを提案し、協議することで、成果と課題を分析する。 初年度の成果と課題を明らかにし、次年度の研究構想案を修正するとともに、次年度教育課程試案及び年間計画を作成する。
第2年次	<p>第一年次の成果と課題に基づき、2領域における「分かち合い、共に未来を創造する子ども」を育む指導と評価の在り方について実践を進める。</p> <ul style="list-style-type: none"> 第一年次に作成した年間計画を実施するとともに、本校が目指す子どもの姿を促す指導について、2領域の内容や方法の研究を深めることで、附属高松小プランの改善を進める。 外部評価として、運営指導委員会及び学校評議委員会での研究協議により、教育課程の課題を検討するとともに、改善を図る。 本校の研究発信の場である初等研究発表会の開催において本年度の取り組みを提案発表し、成果と課題を明らかにすることで、教育課程の改善を図る。 第二年次の実践の成果と課題を明らかにし、次年度の研究構想を修正するとともに、次年度教育課程試案及び年間計画を作成する。
第3年次	<p>第二年次の成果と課題を踏まえ、2領域相互の関連を明確にし、特に新領域「創造活動」の指導と評価の在り方について実践を進める。</p> <ul style="list-style-type: none"> 第一年次と第二年次で作成した年間計画を実施することにより、2領域の関連を意識した実践をしながら、「分かち合い、共に未来を創造する子ども」を育む教育課程を明らかにする。また、各単元間、各学年間の教育内容の関連性も視野に入れた見直しを図り、目指す子どもを育む教育課程へと修正する。 外部評価として、運営指導委員会及び学校評議委員会での研究協議により、教育課程の課題を検討するとともに、改善を図る。 本校の研究発信の場である初等研究発表会の開催において、本年度の取り組みについて提案発表を行い、成果と課題を明らかにするとともに、最終年度に向けた研究内容や方法の改善を図る。 第三年次の実践の成果と課題を明らかにし、最終年度の研究構想を修正するとともに、教育課程試案及び年間計画を作成する。
第4年次	<p>第三年次までの成果と課題を踏まえ、「分かち合い、共に未来を創造する子ども」を育むカリキュラムの総括を行い、指導と評価の在り方をまとめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> 「分かち合い、共に未来を創造する子ども」を育成するために「分かち合う学び」の視点から構成した各領域の附属高松小プランをまとめ、創造活動における各学年のねらいと各活動における内容の総括を行う。 運営指導委員会による最終年度の評価を実施する。 本校の研究発信の場である初等研究発表会の開催において本校の取り組みを提案発表し、これまでの成果と課題を明らかにする。 これまでの成果と課題を明らかにし、研究報告書の作成をする。

(3) 評価に関する取組

	評価方法等
第1年次	<p>目指す子どもを育成するための教育課程を編成し、それらを試行することを通して研究内容や方法について分析・検討をし、研究構想及び研究仮説の課題を明確にする。</p> <ul style="list-style-type: none"> 前年度及び本年度の全国及び香川県の学力・学習状況調査や質問紙の分析を行い、2領域の意義や価値についての課題を分析する。 児童の実態を踏まえ、2領域における6学年を通した長期的な評価の指標を設定し、それに基づいた各教科や新領域での評価の指標を作成する。 外部評価として、運営指導委員会や学校評議委員会において研究協議を行い、教育課程の課題を検討する。また初等研究発表会等での提案発表を通して、成果と課題を明らかにする。
第2年次	<p>第一年次に分析した課題に基づく研究仮説により、実施した教育課程における研究内容や方法について効果の検証を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> 年度末に児童・保護者・教師を対象に質問紙を行い、教育課程の成果と課題を分析する。 全国及び香川県の学力・学習状況調査の結果について前年度の比較分析により、2領域の価値や意義を分析し、教育課程の改善を図る。 作成した評価の指標について実践を通して吟味し、修正・改善する。 児童のエピソード記録を行い、年間を通した児童の変容について分析する。 外部評価として、運営指導委員会や学校評議委員会において研究協議を行い、第二年次の教育課程の成果と課題を検討する。初等研究発表会等での実践を通して、成果と課題を明らかにする。
第3年次	<p>第一・二年次における教育課程の実施による成果と課題を明確にすることにより改善した研究内容や方法について効果の検証を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> 年度末に児童・保護者・教師を対象に質問紙調査を行い、その結果を仮説に照らし合わせて、本教育課程の成果と課題を分析する。同様に、全国及び香川県の学力・学習状況調査の結果の推移を分析することにより、教育課程の成果と課題を分析する。 前年度修正した評価の指標について、実践を通してその有用性を吟味し、修正・改善する。

	<ul style="list-style-type: none"> ・児童のエピソード記録に基づき、児童の変容の分析を行う。 ・外部評価として、運営指導委員会や学校評議委員会において研究協議を行い、第三年次の教育課程の成果と課題を検討する。初等研究発表会等での実践を通して、成果と課題を明らかにする。
第4年次	<p>これまでの改善した教育課程の実施による効果の検証を行い、研究内容や方法について総括する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全国及び香川県の学力・学習状況調査、年度末に行う質問紙の第二年次からの推移を分析し、本研究開発の総括を行う。 ・6年間を通した評価の指標について、児童のエピソード記録との関連をもたせ、児童の実態から本研究開発の成果と課題を総括する。 ・外部評価として、運営指導委員会や学校評議委員会において研究協議を行い、最終年度の教育課程の成果と課題を検討する。初等研究発表会等での実践を通して、成果と課題を明らかにする。

5 研究開発の成果

(1) 実施による効果

新カリキュラムを構想するにあたり、児童と保護者、教員の意識についてアンケート調査を行った。また、このアンケートは年に2回実施し、その傾向を分析することによって研究の成果と課題に生かすものとする。

アンケート調査は、大きく2つを実施する。

○全国学力状況調査及び香川県学習状況調査の各質問紙における本研究に関わる項目

○本研究の成果と課題を見出すための本校独自のアンケート項目

である。いずれも、本校の研究に関するものであり、経年変化も捉えていくことを目的としている。

① 全国学力状況調査及び香川県学習状況調査の各質問紙の結果及び分析

次に示す2つの質問は、これまでの本校におけるカリキュラムで目指す子ども像を意識し、毎年の変化をみてきているものである。

「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」 (%)	全国学力状況調査(6年のみ)	香川県学習状況調査(3～6年)
自分にはよいところがあると思いますか。	71	72
将来の夢や希望をもっていますか。	89	89

2つの質問共に、70～80%であるため、比較的よい傾向を示していると考えられる。特に、夢や希望をもつことに対して、新しいカリキュラムを意識し始めた昨年度より高い傾向を示している。自ら課題をもち解決していく学びを大切にしていることが大きく影響していると考えられるのではないかと。

② 研究開発に関する本校独自のアンケート調査の結果及び分析

ア 児童アンケート

児童アンケートでは、「(ア)本研究で育みたい3つの資質・能力に関する項目」「(イ)学校評価に関する項目」について尋ねた。

(ア) 本研究で育みたい3つの資質・能力に関する項目

本研究で育みたい3つの資質・能力に関する質問項目を作成した(表1)。項目作成の手順として、資質・能力に関する定義から要素を抽出してキーワード化し、心理学や教育学の諸概念を参考にしながら整理した。

【3つの資質・能力】

資質・能力	定義	項目
夢や憧れをもち、自律的に学び続ける力	現在の自己の姿と目指す自己の姿を明確にもち、目指す自分や解決したい課題に夢や憧れをもち、追求し続ける力。	①②③
「ひと・もの・こと」へ共感的・協同的に関わる力	自分や多様な他者、状況等を肯定的に受け入れるとともに、自他の課題を解決しようとする自分の考えをきちんと表しながら他者と協同して問題を解決していく力。	④⑤⑥
創造的に問題を解決し、価値を創造する力	自分にとっても他者(社会・集団)にとってもよりよい問題解決の見通しや方略を見出したり、そこでの価値や活動を創造したりする力。	⑦⑧⑨



【3つの資質・能力に関する項目の児童の回答】

※網掛けは肯定率が上昇したもの

	1回目		2回目		t値
	肯定率	平均値	肯定率	平均値	
①同じ学年の友だちや違う学年の友だちと、おたがいに励まし合ったり、応援しあいながら学んでいる	86.8	3.4	87.4	3.4	0.5
②学校での学びに、興味をもって自分からとりくんでいる	77.6	3.2	81.1	3.2	0.2
③「こうなりたいな」という夢やもくひょうをもっている	83.3	3.4	89.8	3.6	5.4**

④自分と違う意見をもっている友だちとも、協力していっしょに学んでいる	81.2	3.3	85.6	3.4	2.1*
⑤授業で教わったことや調べたことについて、自分なりに考えている	76.5	3.1	79.8	3.2	0.0
⑥友だちといっしょに学ぶときに、友だちがどうしたいとおもっているかを考えている	79.0	3.2	79.7	3.2	0.6
⑦友だちのがんばりを、自分のことのようによこべる	81.6	3.3	83.2	3.3	0.9
⑧教科の授業で学んだことを、創造活動のときに役立てている	68.5	2.9	67.9	2.9	0.6
⑨同じ学年の友だちや違う学年の友だちと、いっしょに何かを作りあげたり、新しい発見をしたりしている	82.0	3.4	85.8	3.4	0.3

項目⑧をのぞき、すべての項目で2回とも肯定率は75%以上であり、高い値を示している。特に、項目③「「こうなりたいな」という夢や目標をもっている」と項目④「自分と違う意見をもっている友だちとも、協力していっしょに学んでいる」の平均値については、1回目から2回目にかけて、統計的に有意な上昇がみられた。これまで、本校の課題であった「夢や希望をもつ」に対する意識が上昇しており、新カリキュラムにおける「創造活動」の取り組みのよさを子どもたちが実感しているのではないかと考えられる。

今後の課題としては、教科学習と創造活動との関連性や、家庭との連携(自己の課題の日常化)という点が挙げられる。

(イ) 学校評価に関する項目

毎年度末に本校で実施されている学校評価アンケートの項目をもとに今年度の状況に合わせて修正して用いた。前年度より、自分の考えを積極的に表出することが本校の児童の課題であった。例えば、平成24年度の学校評価において、「学校や学級で、自分がアイデアを出すところがありますか」に肯定な回答をした児童の割合は75%、「自分の考えを発表していますか」に肯定な回答をした児童の割合は75%であった。これらの側面について、本年度は、「普通の学級」と「縦割りの学級」に分割して尋ねた。また、自尊感情・規範意識等に関する項目を新たに作成した。

尚、2回目はこれまでの学校評価の項目も追加して調査している。

【学校評価に関する項目の児童の回答】

※網掛けは肯定率が上昇したもの

	1回目		2回目		t値
	肯定率	平均値	肯定率	平均値	
①学校に行くのが楽しいです	87.6	3.4	88.4	3.4	1.0
②普通の学級で、創造活動の時間を楽しくすごせています	—	—	88.5	3.5	—
③縦割り学級で、創造活動の時間を楽しくすごせています	84.0	3.4	82.0	3.3	1.8
④普通の学級で、わたしが活躍できるところがあります	73.5	3.0	73.0	3.0	0.2
⑤縦割り学級で、わたしが活躍できるところがあります	73.3	3.0	72.1	3.0	0.5
⑥普通の学級で、わたしがアイデアをだすところがあります	70.5	3.0	72.4	3.0	0.5
⑦縦割り学級で、わたしがアイデアをだすところがあります	71.0	3.0	70.1	3.0	0.5
⑧普通の学級で自分の意見が言えます	73.0	3.1	73.1	3.1	0.7
⑨縦割り学級で自分の意見が言えます	71.2	3.0	72.0	3.1	0.9
⑩家に帰ってからも、創造活動をしたことがあります	58.5	2.7	62.3	2.8	1.7
⑪英語の時間は、楽しく活動しています	88.5	3.5	81.5	3.3	4.4**
⑫ものごとを最後までやりとげて、うれしかったことがあります	—	—	90.3	3.6	—
⑬自分には、よいところがあるとおもいます	—	—	77.0	3.1	—
⑭学校のきまりをまもっています	—	—	87.4	3.3	—
⑮近所の人、先生や友だち、学校にきたお客さまなど、だれかに会ったときは、あいさつをしています	—	—	88.2	3.4	—
⑯学校の時間(時間割)はすごしやすいです	—	—	71.7	3.0	—

項目⑩をのぞき、すべての項目で肯定率が7割以上であり、高い値を示している。創造活動における楽しさや自己の活躍の場などがあるようである。特に、項目⑨「縦割り学級で自分の意見が言えます」がわずかではあるが、上昇している。創造活動の時間が毎日確保され、互いの関係性の向上と共に、各プロジェクトでの課題を解決していく過程での充実感があつたのではないかと考えられる。

また、項目⑫「ものごとを最後までやりとげて、うれしかったことがあります」(2回目のみ)の肯定率は、9割以上であった。新カリキュラムでは、教科学習も創造活動も主体的な学びを重要視しており、個々の課題を解決していく過程を大切にしている。その結果、自分の思いや願いに基づいた課題設定と共に、解決していく面白さや喜びが味わえるような学びによって、学ぶ価値の実感につながったのではないかと考えられる。

イ 保護者アンケート

保護者アンケートでは、「(ア) 本研究で育みたい3つの資質・能力に関する項目」「(イ) 創造性・道徳性・学校の楽しさに関する項目」「(ウ) 学校評価に関する項目」について尋ねた。ここでは(ア)の結果のみを示す。

※網掛けは肯定率が上昇したものの

	1回目		2回目		t値
	肯定率	平均値	肯定率	平均値	
①クラスや学年を超えて、友だちと協力し合いながら学んでいる	92.8	3.5	95.7	3.5	2.0*
②学校での学びに、興味をもって自分から取り組んでいる	92.3	3.4	90.9	3.4	0.4
③「こうなりたいな」という自分の姿を、思い描いている	75.5	3.1	77.7	3.1	1.4
④自分と違う意見をもっている友だちとも、協力して一緒に学んでいる	86.7	3.2	89.9	3.3	1.4
⑤学校で教わったことや調べたことについて、自分なりに考えている	89.0	3.3	90.6	3.3	1.3
⑥友だちと一緒に何かをするとき、自分のことだけでなく、友だちがどうしたいと思っているかも考えている	86.7	3.3	90.1	3.3	1.3
⑦友だちのがんばりを、自分のことのように喜んでいる	84.4	3.3	86.3	3.3	0.9
⑧学校で学んだことを、普段の生活の中で役立てている	87.1	3.2	88.6	3.2	0.7
⑨クラスや学年を超えて、友だちと一緒に何かを作りあげたり、新しい発見をしたりしている	87.4	3.3	90.8	3.4	2.0

すべての項目について、2回とも肯定率が7割以上、平均値が3点以上であり、高い値を示した。特に、項目①「クラスや学年を超えて、友だちと協力し合いながら学んでいる」と項目②「学校での学びに、興味をもって自分から取り組んでいる」は、2回とも肯定率が9割を超えていた。創造活動を中心に、共感的・協同的に問題解決していく学びを子どもの姿から感じ取っているのではないかと。

また、他の項目においても、仲間と共に学ぶ価値の実感につながる項目について、高い値を示しており、新カリキュラムでの子どもの姿に肯定的な印象をもっているようである。ただし、アンケートの記述欄には、基礎的・基本的な学力の向上を求める声も挙げられていた。本校のカリキュラムは、主体的な学びを通して、子どもたちに必要な資質・能力を育むことを目指していることから、子どもたちの様々な姿によって、新カリキュラムでの基礎的・基本的な学力の向上も期待できることを伝えていくことが大切であるといえる。

ウ 教師アンケート

教師アンケートは、保護者アンケートと同様に「(ア) 本研究で育みたい3つの資質・能力に関する項目」「(イ) 創造性・道徳性・学校の楽しさに関する項目」「(ウ) 学校評価に関する項目」について尋ねた。ここでは(ア)の結果のみを示す。

※網掛けは肯定率が上昇したものの

	1回目		2回目		t値
	肯定率	平均値	肯定率	平均値	
①クラスや学年を超えて、友だちと協力し合いながら学んでいる	91.7	3.2	88.5	3.4	1.1
②学校での学びに、興味をもって自分から取り組んでいる	95.9	3.3	92.3	3.3	0.6
③「こうなりたいな」という自分の姿を、思い描いている	62.5	2.6	76.9	3.0	2.0*
④自分と違う意見をもっている友だちとも、協力して一緒に学んでいる	91.7	3.2	88.5	3.2	0.1
⑤学校で教わったことや調べたことについて、自分なりに考えている	75.0	2.8	76.9	3.1	1.3
⑥友だちと一緒に何かをするとき、自分のことだけでなく、友だちがどうしたいと思っているかも考えている	75.0	2.8	76.9	2.9	0.8
⑦友だちのがんばりを、自分のことのように喜んでいる	70.8	2.9	69.2	2.9	0.2
⑧学校で学んだことを、普段の生活の中で役立てている	62.5	2.8	69.2	2.9	0.9
⑨クラスや学年を超えて、友だちと一緒に何かを作りあげたり、新しい発見をしたりしている	79.2	3.0	84.6	3.3	1.6

項目①「クラスや学年を超えて、友だちと協力し合いながら学んでいる」、項目②「学校での学びに、興味をもって自分から取り組んでいる」は、2回とも肯定率がほぼ9割と高い値を示した。また、項目④⑤⑥は、2回とも肯定率が7割を超えており、高く評価されていた。しかし、「友だちのがんばりを自分のことのように喜んでいる」と項目⑧「学校で学んだことを、普段の生活の中で役立てている」については、やや肯定率が低めであった。

今後の課題として、共感的・協同的な問題解決の姿について教員間で共有すると共に、そのような学びに向かうための授業づくりの「しかけ」について再吟味したい。また、領域間の関連性についても検討していきたい。

(2) 実施上の問題点と今後の課題

研究開発1年次として、年間40本を超える授業提案とその後の討議会、運営指導委員会や学校評議委員会等を通して様々な課題と今後の方向性が見えてきた。具体的には以下の示すとおりである。

研究開発上の問題点

① 教科学習

- ・ 2領域カリキュラムにしていることから、教科学習がこれまでの学習指導要領でのものから「見方・考え方」に着目することでその内容や評価の在り方を変えていくこと。
→育みたい見方・考え方の設定により、その教科の本質的な見方・考え方を授業の中で具体的にどのように想定しているのかが十分に説明しきれていない。
→時数を減少していることから、その教科内容をどのように精選しているのかが見えにくい。
→各教科の本質について見直しを図り、学年間、及び単元間での関連性や系統性を考慮し、具体的な内容の精選と見直しを図られなければならない。

② 創造活動

- ・ 道徳・特別活動・総合的な学習の時間の3つの領域を統合して、新領域「創造活動」を創設しているので、それぞれの領域のよさをどのように生かし、改編しているのかが説明できていない。
→道徳的価値をどのように扱っているのか等、具体的に説明していかなければならない。
- ・ 創造活動が縦割り集団での活動を核としていることから、異学年での共感的・協同的な問題解決の在り方が問題点として挙げられ、そこで創造される価値をどのように扱っていくのかが明確になっていない。
→発達段階を考慮した評価の在り方を検討しなければならない。個々の発達を意識し、どのような姿を目指し、支援していくのかが明らかになっていない。
- ・ 自己の生き方・在り方を生み出すための活動を、学級創造活動と縦割り創造活動の関連性から、どのように工夫されているのか、育みたい資質・能力から分析できていない。
→それぞれのねらいを更に明確にすると共に、育みたい資質・能力との関連から検討する必要がある。
→内容の関連ではなく、自己の生き方・在り方につながる価値をどのように関連的に創造していくのかを検討しなければならない。

③ カリキュラム全体として

- ・ 今年度は、教科学習と創造活動の独自性を追究してきたため、2領域が互恵的に働くように意図的に構想されていない。
→ただし、2領域共に、授業づくりの「しかけ」を検討することによって、目指す子ども像に向けた大切な視点を考えることができた。来年度以降は、その視点に基づき、その関連性について明確にしていきたい。

課題から今後の方向性を見出す

① 教科学習

- ・ 各教科における見方・考え方を明確にすることで、指導と評価の在り方を検討する。
- ・ 見方・考え方の視点から、学年間・単元間の関連性・系統性から、学習内容の精選を図る。
- ・ 子ども主体の学びを目指し、共感的・協同的な問題解決の在り方を検討する。

② 創造活動

- ・ 学級創造活動と縦割り創造活動の関連性とその具体的な内容についての要件を検証する。特に、創造された価値をどのように分析し、各発達段階と関係づけて検討しなければならない。
- ・ 子どもが問題解決していく中で、価値を判断し、さらには価値を創造していくことのできるための要件を検証する。(創造活動の独自性とそのよさの検証)
- ・ 個や集団が価値を創造していく過程における生き方・在り方についての評価の在り方を検討する。
- ・ 子ども主体の学びを目指し、共感的・協同的な問題解決の在り方を教科学習と関連させて検討する。

③ カリキュラム全体として

- ・ 2領域が互恵的に働き、育みたい資質・能力との関係性から、目指す子どもに向かう筋道を検討する。その際、各領域の独自性を大切にしなければならない。授業づくりの「しかけ」について、共通するものとその領域独自のものを明らかにすることで、3つの「しかけ」の関係性も更に具体化できるものとする。
- ・ 各領域のよさ(独自性)を追究する上で育みたい資質・能力の細分化はしない方向性を保ちたい。